

為替介入観測期待等を背景に、日本株は引けにかけて下げ幅を縮める

2010年8月12日(木)

第一生命経済研究所 経済調査部
副主任エコノミスト 人見 小奈恵
TEL 03-5221-4523

e-mail: hitomis@dlri.dai-ichi-life.co.jp

世界景気減速懸念の広がりを背景に、投資家はリスク回避姿勢を強める

前日のFRBの景気判断の下方修正に加え、米貿易赤字拡大や中国のマクロ経済指標の成長鈍化等を受けて、世界景気減速懸念が広がり、市場全体にリスク回避の動きが鮮明となりました。

商品先物市場では原油をはじめ非鉄金属も軒並み大幅安となりました。また、為替市場では投資家のリスク回避姿勢の高まりを受けて円は主要通貨に対して堅調に推移し、対ドルでは一時84.72円と約15年ぶりの高値をつけたほか、対ユーロでも109円台まで急速に円高が進みました。ユーロの弱さが目立ったのは、英国での消費者信頼感指数が予想を下回ったことなどからポンド・ドルが下落し、これにユーロが連れ安したことも一因でした。

欧州株式市場は銀行や素材株中心に大幅続落となりました。米国株式市場も世界景気減速懸念等を背景に大幅続落となりました。前日のFRBによる金融緩和策の継続について、市場では景気押し上げ効果は限定的との冷静な見方が広がったほか、6月の米貿易収支で貿易赤字が予想以上に拡大し、米景気に対する回復力の弱さが意識されたことも相場の重石となりました。全面安の中、金融やハイテク、エネルギー・素材、資本財・サービスなどが下げを主導しました。米S&P500のVIX指数も+13.5%と急伸し、投資家心理の悪化が窺えました。6月の米貿易収支は輸入の増加等を背景に499億ドルの赤字となり、08年10月以来の赤字幅となりました。赤字幅は前月(420億ドル)より拡大したほか、市場予想(421億ドル)も上回りました。これを受けて、各金融機関のエコノミストによる4-6月期の米GDP成長率予想の下方修正が相次ぎました。

引け後に発表された米ネットワーク機器大手の5-7月期決算で売上高が予想を若干下回り、8-10月期売上高見通しも予想を下回ったことから時間外取引で大幅安となりました。前日は半導体大手がアナリストによる業績見通しの下方修正を受けるなど、企業業績見通しも慎重な見方が目立ち始めています。

世界景気減速懸念を背景に大幅安で始まるも、為替介入観測等が日本株を下支え

欧米株安や円高進行等を受けて日本株は大幅安で始まりました。全セクターがマイナスとなる中、下落率上位には保険、ガラス、鉄鋼、証券、不動産、電機、非鉄、機械など景気敏感株が並びました。また、外資系証券会社が米景気減速に伴う輸出鈍化や円高等を理由に、日本の11年のGDP成長率予測を下方修正(1.7%→1.4%へ)したことも市場心理を冷やしました。大型の輸出関連株や銀行株が相場下落を主導する中、内需関連株にも売りが広がり、寄り付き直後から安値を更新する銘柄が相次ぎました。ただし、安く寄り付いた後の動きは鈍く、日経平均株価は9,100円台前半での小動きが続きました。後場寄り先物主導で前場引値より安く始まり、日経平均株価は一時▲230円近く下げました。しかし市場で「財務官が日銀幹部と円高について協議」との報道や、財務大臣の緊急記者会見等が伝わるなど、政府や日銀による為替介入期待が徐々に高まる中、日銀によるレートチェックも行われ、円は主要通貨に対して売り戻されました。これを受けて日経平均株価は大引けにかけて先物主導で下げ幅を縮め、結局、日経平均株価は▲80円安の9212円と5日続落で引けました。

世界的に景気減速懸念が広がる中、円高進行も加わり、日本株は寄り付きで大きく下げましたが、売り一巡後は為替政策の動向を見極めたいとの思惑から、円相場の動向に左右される相場展開でした。 以上